

## 論文審査の結果の要旨

報 告 番 号	乙 第 1189 号	氏 名	鬼 頭 恆
論 文 審 査 担 当 者	主 査 池 田 修 一 副 査 本 郷 一 博 ・ 角 谷 眞 澄		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>老年期うつ病と、初期のアルツハイマー病は、鑑別が難しいのが現状である。うつ病の症状である意欲低下と認知症の症状であるアパシーは、簡単に見極められないケースが存在する。老年期うつ病は、うつ病による因子と加齢による因子が影響しあい認知機能障害を伴いやすく、このことも診断を難しくしている。こうした課題をかかえた高齢者の日常臨床において、近赤外線スペクトロスコピー (Near-InfraRed Spectroscopy : NIRS) を両者の鑑別補助的に利用できないかと考え、NIRSを用いて、老年期うつ病とアルツハイマー病の脳皮質賦活反応性に違いがあるか検討を行った。60歳以上の右利きの男女で、DSM-IVの基準により診断された、うつ病30名、アルツハイマー病28名、健常者33名を対象にNIRSを実施した。NIRS測定の際の賦活課題は、語流暢課題と視空間認知課題(Benton Judgment of Line Orientation)の二つを用いて、前頭葉と頭頂葉の酸素化ヘモグロビン濃度変化量を調べ、比較検討した。前頭葉に22個の記録チャンネル、頭頂葉に22個の記録チャンネルができるようにプローブの配置をし、被験者は椅子に座り、卓上のパソコン画面を見た状態でNIRS測定した。</p> <p>その結果、鬼頭は以下の成績を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. アルツハイマー病群では、脳皮質の賦活反応が比較的保たれており、うつ病群では賦活反応が低下している傾向がみられ、頭頂葉の領域で有意な差が認められた。</li><li>2. 頭頂葉で有意差が検出されたチャンネルの一つでは、感度71.5%、特異度70.0%でうつ病とアルツハイマー病の鑑別が可能であった。</li><li>3. 頭頂葉の上頭頂小葉や楔前部は、視空間イメージ、エピソード記憶の再生、自己処理に関する操作の機能があり、この賦活反応の差は、これらの脳領域でのアルツハイマー病とうつ病の脳機能の違いを反映していると考えられた。</li><li>4. 語流暢課題においては、健常群とうつ病群の比較でのみ賦活反応量に有意差が認められた。</li></ol> <p>以上により、NIRSは、老年期うつ病とアルツハイマー病を鑑別するための有用な補助診断法であると考えられた。NIRSはfMRIなどに比べ、賦活課題をかけやすく、また侵襲性がなく、操作も簡便であるため、ベッドサイドでも実施できるメリットがある。今後の研究の積み重ねにより、NIRSが臨床応用される可能性もあると考えられた。</p> <p>したがって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			